

コミュニケーションにおける生きづらさとどう向き合うか —創作物語「each」を通して—

齋藤 翔平

本論文では、コミュニケーションにおける生きづらさと原因、及びその向き合い方について論じている。

まず、コミュニケーションにおいて生きづらさを抱えてしまうのは、「日本社会の『空気を読む・察する事の要求』『同調圧力』」が原因であり、それがやがて、犯罪や自殺といった逸脱行為へと人を導いてしまうのではないかと考えた。その仮説の証明の為の研究で見えてきたのは、「日本人は他国と比べると内向きの性格なのではないか？」という事だった。これは、留学をした友人と外国人教員を対象に実施した、日本と海外のコミュニケーションの比較の為のインタビュー調査で分かった事である。これと併せて、日本人が無意識に求めるコミュニケーション能力、アーリー・ホックシールドの「感情労働」の考えを基に、生きづらさを掘り下げ、このような社会になった原因を考察した。そして、生きづらさを抱えさせる社会を、創作物語「each」で表現すると共に、筆者自身の悩みもキャラクターに具現化して表現した。「人からその本人の問題を切り離して考える事が常に行われている (Morgan, 2000=2003 : 34)」とするナラティブ・アプローチにも通じるこの手法により、今回、自身の内面と向き合う事が可能となり、この手法の効果を筆者自身が体感して証明する事が出来たのである。このように、創作物語と社会学等の理論との相互作用を通して、仮説の証明と、生きづらさへの向き合い方についての主張を行うことができた。

本論の第1章では、生きづらさを論じる前段階として、コミュニケーションは一般的にどのように捉えられているか、種類と手法、SNSの登場によるコミュニケーションの変化等を、文献を中心に調べた。

第2章では、生きづらさについて、日本と海外のコミュニケーションの違いにその背景を探るために実施したインタビュー調査の結果をもとに、日本社会が求めるコミュニケーション能力と、「感情労働」で起こる弊害をまとめた。

第3章では、研究内容と自身の経験を落とし込んだ「each」という物語を創作した。物語を通して生きづらさへの向き合い方を論じている。

以上の検証から、終章では、生きづらさの要因とそれへの対応を、具体的に論じることが可能となった。